

東南アジア古典文化論:インド化(Indianization) ver 2

ブログ→<http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/aoyama/0200/0250/>

1. 「インド化」とは

- ・現在の東南アジアにおける「インドの影響」をどう説明するか⇒歴史的事象としての「インド化」
- ・西暦紀元前後以降のある時期から始まった東南アジアにおけるインド文明の受容。「インド化」を主題としたものも基本的な文献はセデス(1968)である。
- ・セデスは「インド化」を次のように定義している(1968: 15-16):
インド的王権概念に基づいた文化体系の地理的拡張であり、ヒンドゥー教もしくは仏教の信仰、プラーナ諸文献の神話、ダルマシャーストラの順守によって特徴づけられ、サンスクリット語によって表現されるものである。
- ・セデス:サンスクリット語による表現という点に注目すると、「インド化」は「サンスクリット化」(人類学の用語としては特別な意味)と呼ぶことができる。
- ・サンスクリットを記録する手段としての南方系ブラーフミー文字の伝播と普及にも注意(青山 2002)。
- ・インド化は、インド本土において進行していた現象の海外への延長
 - ・「東南アジアのインド化は最初期に北西インドにおいて進展した「バラモン化」の海外への延長である」というセデス(1968:15)の指摘は、インド化の性格を理解する上できわめて重要である。
 - ・セデス(1968:15)はさらに「東南アジアの最初期のサンスクリット刻文の出現はインド本土の最初期のサンスクリット刻文の出現からさほど隔たっていない」ことをその例証としている。
 - ・セデス「[東南アジアに移植されたサンスクリットないしはインド文明と]ベンガルの「サンスクリット文明」との唯一の違いは前者が海を通じて広がったのに対して後者が陸を通じて広がったことである」

2. インド化の歴史的過程

- ・セデスの「第一次インド化と第二次インド化」説には問題あり。
- ・インド人の東南アジアについての認識:
 - ・紀元前後からあり。ジャータカにおける航海者の物語。『ラーマーヤナ』における言及。パーリ仏典 Niddesa における言及。
- ・航海技術の発達
 - ・モンスーンの発見(<mausim アラビア語「季節」)「ヒッパロスの風」紀元後 1 世紀頃。
 - ・『エリュトラ海案内記』1 世紀頃。
- ・オケオ(メコン川下流西方)
 - ・2・3-6・7 世紀に港市が存在し。南シナ海とタイ湾を結ぶ中継基地。扶南の外港。
- ・扶南建国神話
 - ・碑文史料:バラモンのカウンディンヤが渡来、現地首長の娘ソマーと結婚して建国。
 - ・『梁書』(6 世紀)『南齊書』:柳葉という女王が統治していたところへ、模倣国の混填が扶南外港に至ってこの地を占領し、柳葉と結婚して扶南の最初の王となった。
- ・5 世紀—インドネシアの初期王国の成立と「インド文化の爆発的な東漸」
 - ・5 世紀、Kutai 碑文。Mūlavarman<Aśvavarman<Kuṇḍunga
 - ・5 世紀、Tāruma 国。Pūrnavarman

インド化の担い手

- ・「クシャトリア」(武士階級)説:インド人による軍事的征服
- ・「ヴァイシャ」(商人階級)説:商人の来航
- ・「バラモン」(学者・知識人)説:F.D.K.ボス。紀元後 1-2 世紀に大乘仏教が発達し、海外への布教活動がなされた。僧侶の海外布教は交易ルートの確立と関係。5 世紀頃には中国人僧のインド留学も開始(法顕 5 世紀前半、玄奘 7 世紀中頃、義浄 7 世紀後半)
- ・東南アジア側からの能動的な受容

3. インド側の状況

- ・インド古典文化の完成と普及
 - ・グプタ朝(320-550)におけるインドの古典文化の完成>サンスクリット文化が規範化する。

- ・グプタ朝の崩壊にともない、サンスクリット古典文化の中心がインド各地方に拡散。とくに南インドのインド化(サンスクリット化)が顕著。6-9 世紀、パッラヴァ朝の発展。
- ・大乘仏教(密教)の発達と東漸
 - ・2-3 世紀頃、竜樹(中観)、5 世紀頃『華嚴経』(毘盧舎那仏)。
 - ・ナーランダー僧院(5-12 世紀)が仏教の教育センターとして機能。
 - ・奈良東大寺大仏盧舎(遮)那大仏の開眼供養会 752 年(天平勝宝 4)。インド人バラモン菩提僊那が開眼導師となり、林邑楽などが演奏された。
 - ・ボロブドゥール(850-950 年頃)。中部ジャワ。『聖大乘論』

このユニットのまとめ

- ・「長い助走期間」単にインド人が来訪していた、インドの文物が伝来したというだけでは「インド化」とは言えない。逆に、インド人の「支配」があつて初めてインド化が可能となったわけではない。
- ・現地での自律的な国家形成の段階を経て、はじめて能動的なインド化が始まった。
- ・東南アジアの「インド化」とインド文化の「現地化」
- ・交易拠点の形成・農業技術の発展⇒初期国家の形成⇒王権の制度化にともなうインド化

残された問題

- 1) カースト制はなぜ東南アジアに定着していないのか？
- ・カースト制はインド文明の根幹であるが、東南アジアには定着しなかった(概念は知られている。14 世紀のジャワの記録にはみえる。現在のバリ社会においても形式的ではあるがカーストがある)。
- 2) そもそもなぜ初期の東南アジアは(ベトナムを除いて)「中国化」ではなく「インド化」したのか？
- ・東アジア世界と東南アジア世界の根本的な違い

宿題

- ・大学のパソコンから附属図書館オンライン・サービスのページにアクセス：
<http://www.tufs.ac.jp/common/library/guide/list/online.html>
- ・Gale Virtual Reference Library に接続
- ・基本検索の枠に「Indianization」と入力し検索。ヒットしたリストから以下のリンクをクリック：
[Hinduism in Southeast Asia.](#) Vasudha Narayanan. *Encyclopedia of Religion*. Ed. Lindsay Jones. Vol. 6. 2nd ed. Detroit: Macmillan Reference USA, 2005. p.4009-4014.
- (必要なら View PDF pages をクリックして PDF ページを表示し、プリントアウト)
- ・この論文の中の Indianization について議論をおこなっている部分(p.4010)を読み、600 字以内の要旨(日本語)を作ってください。とくに、現代の東南アジアにおいて古典インド文化の影響がもつとも残っている分野に言及してください。6 月 2 日の授業時に提出。A4 判、最初に氏名・学生番号を明記。

参考文献

- Coedès, G. 1968. *The Indianized States of Southeast Asia*. Orig. French ed. 1964. Eng. ed. by Walter F. Vella, tr. by Susan Brown Cowing. The University Press of Hawaii.
- Kulke, Hermann. 2001. *Kings and Cults: State Formation and Legitimation in India and Southeast Asia*. New Delhi: Manohar.
- Narayanan, Vasudha. 2005. "Hinduism in Southeast Asia." *Encyclopedia of Religion*. Ed. Lindsay Jones. Vol. 6. 2nd ed. Detroit: Macmillan Reference USA, pp.4009-4014.
- Pollock, Sheldon. 1996. "The Sanskrit Cosmopolis, 300-1300: Transculturation, Vernacularization, and the Question of Ideology." *Ideology and Status of Sanskrit: Contribution to the History of the Sanskrit Language*. Ed. J.E.M. Houben. Leiden, New York: E.J.Brill.
- 青山 亨. 2002. 「東南アジア島嶼部におけるインド系文字」『上智アジア学』20. pp.11-24.
- . 2007. 「インド化再考—東南アジアとインド文明との対話—」『総合文化研究』10. pp.122-143. 電子版<<http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/28733/1/tcr010008.pdf>>
- . 2010. 「サンスクリット化」奈良康明・下田正弘・林行夫(編)『静と動の仏教』(新アジア仏教史第4巻スリランカ・東南アジア) 佼成出版社, pp.260-264.
- 池端雪浦編. 1994. 『変わる東南アジア史像』山川出版社。(とくに深見純生、石井和子論文)
- 応地利明. 1997. 「インド化」『事典東南アジア』弘文堂. pp. 390-391.
- 横倉雅幸. 1997. 「ヒンドゥー文明の受容」『事典東南アジア』弘文堂. pp. 262-263.